

## 《現地研究会アンケート結果》

今回の回答者は、会員61名、非会員12名、不明2名の計75名であった。参加者は90名で回収率は83%と高いものとなった。

### 1. 回答者の年齢層

回答者の年齢分布について、過去3年と比較して図1に示した。年齢分布は例年通り40歳代が最も多かった。現地研究会に参加するのは、組織の中堅から指導的立場にある人が多く、その傾向は例年一定しているようである。

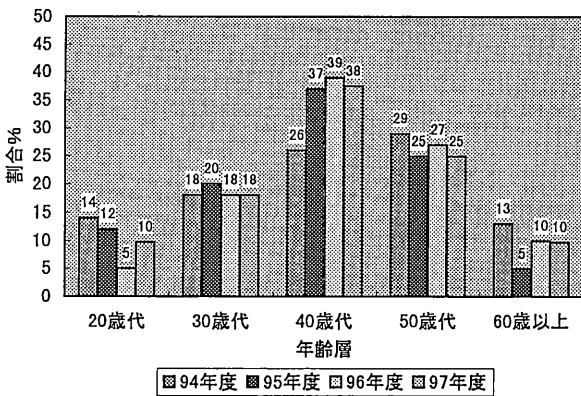


図1. アンケート回答者の年齢分布

### 2. 回答者の職業

回答者の職業について、過去3年と比較して図2に示した。今回も、昨年、一昨年に引き続き北海道開発公社からの参加が最も多く23名であった。次いで、帯広畜産大学9名、北海道大学6名、酪農学園大学4名と続いた。北海道の試験場からは、それぞれ2～3名ずつの参加があった。その他、道外からは筑波の畜産試験場や青森県畜産試験場からの参加があり、糞尿処理に関わる研究者が来られた。今回の現地研究会では、渡島中部地区農業改良普及センターの普及員に説明を受けたものの、その他の地区の農業改良普及員の参加は見られなかったのが残念である。

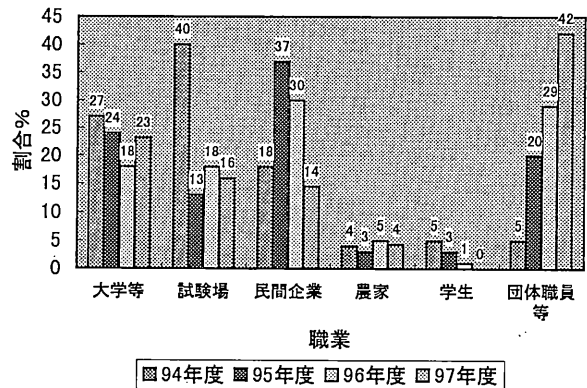


図2. アンケート回答者の職業

### 3. 参加の動機について

参加の動機について項目を上げ、その動機が強いまたは大変強いと回答した人の割合を示したのが図3である。昨年に引き続き糞尿処理に強い関心を示した人が多かった。今、畜産で最も関心の高いのが糞尿処理の問題であるのでこのような結果がでるのは当然かも知れないが、どうも最近の現地研究会に参加する組織や人間が少し偏っているのが気になった。また、昭和56年以来16年ぶりの道南での現地研究会のため、道南の畜産を見たかったという人もかなりいたようである。

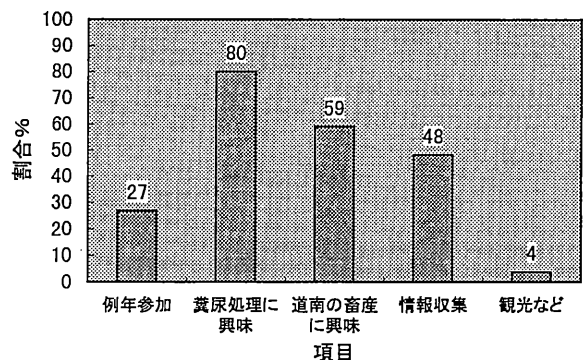


図3. 参加の動機

### 4. 興味深かった視察場所

今回の視察では、小沢牧場と山川牧場が特に多くの参加者の興味を引いたようである。全国規模の牛肉流通ルートを持ち、ホル牡を中心とする

2000頭規模の肉牛肥育の経営をする小沢さんの逞しさに一同感心したようであった。また、山川さんは自家製のビン詰め牛乳を販売する酪農家で、その自信に満ちた説明は、都市近郊型酪農に明るい未来を感じた参加者も多かったのではないであろうか。また、サトー建機の腐食性廃棄物有効利用システムと呼ばれる糞尿処理プラントは、賛否両論の意見があったようであるが、一地方企業の経営者のパイオニア精神を見たというのが参加者共通の思いのようであった。さらに、堆肥舎に屋根をかけるという補助事業を見聞することが出来たのも今回の成果であった。

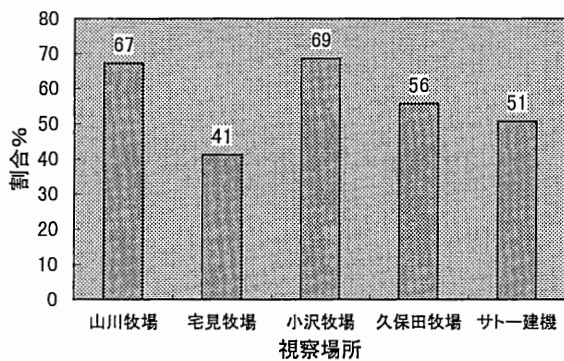


図4. 視察場所に強い興味を示した割合

## 5. 参加費

参加費について、80%の人が妥当または安いと答えてくれた。今年は1万6千円と、昨年より千円高かったが、その価値は認めてもらったことを企画者としてホッと安堵している。今後もこの程度の参加費であれば、内容的な満足感があれば受け入れてもらえることが分かった。

## 6. 今後の展望

今後の現地検討会の内容および視察地域に関する要望の結果は、次のように要約される。内容としては、昨年同様「糞尿処理問題」に関する要望が多く、17名から出された。ただし、その内容は、7名が「都市近郊の糞尿処理問題」を上げていた。今回特徴的なのは、「馬糞の堆肥利用」が3名あ

り、また「馬産」をテーマにという要望が3名あったのが目新しい点であった。その他は、「農村・農家の環境改善」3名、「畑作と畜産の複合化」2名、「鶏・豚の畜産経営」2名、続いて「粗飼料体系」「乳牛耐用年数」「高能力牛飼養」「乳質改善」「低コスト施設」「新搾乳システム」「自家製乳製品」「副産物利用」などが上がっていた。

視察地域としては、道北（天北、宗谷）11名、道央8名（札幌近郊4、旭川・富良野、恵庭・千歳）、日高4、道東3、十勝3、道南2、道外2であった。道北は、平成3年に「オホーツク地方の草地利用と乳肉牛生産」を滝上・雄武・興部で行なっているので、6年間の空白があり、道央は、平成4年に「放し飼い牛舎と乳牛管理」を江別・長沼・千歳で行なっているので、5年間の空白がある。ともに有望な視察候補地域であるが、日高は今まで行っていないと思われるので、馬をテーマにした話題があれば、日高地方の視察も一考の価値があるかも知れない。

この3年間、現地研究会のテーマを決める際、アンケート重視で行なってきたが、このようなことを継続すると、現地研究会に一度参加した者の意見に偏る弊害がおこる。特に最近は糞尿処理をテーマにすることが多かったが、これは現地研究会の参加者に偏りがあったためかも知れない。今後は、シンポジウムなどの機会や案内状送付の機会などにもアンケート調査を実施するなどして、できるだけ広い範囲で会員の要望をくみ取れるよう努力する必要性を感じた。（文責：柏村文郎）